

M63a Boltzmann 方程式自身に問題がある！ - 太陽風への応用

平山 淳 (国立天文台)

Boltzmann 方程式に mv を掛け v で積分すると、衝突・外力無しでは Euler 方程式 $\rho D\mathbf{V}/Dt = -\nabla P$ を得る。地上大気に応用すると、各分子 (例 N_2) は 1 秒後には「衝突無し」としたので 熱速度の 450m 先に行っている筈である! 又この導出では粒子の運動方程式を使用しておらず、Euler 式は流体の運動方程式とは呼べない! 矛盾の解決策は、衝突項だけに衝突があるとせず、気体要素 Δx を $\Delta x \gg L_{mfp}$ (=平均自由行路=40nm) と採り、内部衝突を導入すると $\Delta x \Delta y \Delta z \equiv \Delta r$ の気塊は 1 秒後も殆ど分散せず元通りである。よって下式で $(f\Delta r)_{blob}$ として全項に「衝突」を導入。

衝突優勢な気体の粒子数保存 $\Rightarrow \frac{\partial (f\Delta r)_{blob}}{\partial t} = -\mathbf{v} \frac{\partial (f\Delta r)_{blob}}{\partial \mathbf{r}} - \frac{\mathbf{F}}{m} \frac{\partial (f\Delta r)_{blob}}{\partial \mathbf{v}} + \left(\frac{\partial (f\Delta r)_{blob}}{\partial t} \right)_{col}$ ($\Delta x, \dots \gg L_{mfp}$)
 式の導出 \Rightarrow 位置 r , 速度 v の粒子数 $f(r, v, t)\Delta r\Delta v$ が増加したなら (左辺), Δr 内の衝突の為分散せず外から流入したか, 外力 F の為速度 v の粒子数が増したか, Δr 中の衝突で v の粒子が増した為である。状態方程式も導出し直す (1次元) \Rightarrow 外の粒子 ($v > 0$) が衝突で Δx の気塊に運動量を与え, 衝突で粒子が Δx を出て ($v < 0$) 運動量を Δx に与えた和は $P(V \rightarrow \infty) = [\int_0^V + \int_{-V}^0] m(v - \langle v \rangle)^2 f(v) dv = nkT$ (教科書群に無い方法)。粒子の運動方程式を用いたので, 今や Euler 式は流体の「運動方程式」と呼べる。地球近辺の太陽風では, 速い粒子は衝突せずに運動量を与えない。 P_e の積分は有限の V とすべき。結果は $P_e = \alpha n_e k T_e$, ここで $\alpha \equiv (\text{密度 scale height}/L_{mfp})^{1/2} \leq 1$, 1AU で $P_e \approx 0.4 n_e k T_e$ 。断熱式は $T \propto n^{2\alpha/3}$ ($\alpha \approx 0.4$), 熱伝導率は $\kappa = \kappa_{Spitzer} \alpha^{5/2} \propto T_e^0!$ で観測と合う電子の温度分布を得る。無衝突の CGL 方程式の困難も解決 (非摂動では $nkT \neq 0$ でも $P = 0$)。